



| | |
|--------------|---|
| Title | ごあいさつ |
| Author(s) | 千代, 賢治 |
| Citation | 癌と人. 1997, 24, p. 1-1 |
| Version Type | VoR |
| URL | https://hdl.handle.net/11094/23942 |
| rights | |
| Note | |

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

ごあいさつ

理事長 千代賢治*

皆様には益々ご清祥のこととお慶び申し上げます。

平素は当財団の運営に対しまして、格別のご支援、ご協力を賜り誠にありがとうございます。

さて、私は長年生命保険の普及に携わって参りました。これまでの生命保険は「悲しみのあとに貧しさが来ないように」の言葉に表されますように、残された遺族を経済的側面からバックアップするためのものでした。

しかしながら、ここ最近では、従来型の保険に加え、「生きるための保険」が世間の注目を浴びるようになって参りました。すなわち、リビングニーズ、特定疾病保険などの生前給付型の保険です。死亡を給付要件とするのではなく、発病（確定診断）をもって給付をおこなう保険です。昨年には、「死に至ることは少ないが、完治することも難しい」といわれる重度慢性疾患（高血圧症、糖尿病等）を対象とする保険も売り出されました。

こういった保険が益々普及していくことにより、経済的理由から最先端医療を受けられないということのない社会になって欲しいものです。

しかし、保険自体では病気を治すことはできません。やはり、医療技術の進歩が不可欠です。治療面での技術向上はもちろんのこと、早期発見の技術が、これから「どのくらいのスピードでどのレベルまで到達できるのか」ということが今以上に重要になってくるものと思われます。特に、早期発見がカギをにぎる癌においてはなおさらです。

近年来、新たな発癌物質が相次いで発見されたり、精度の高い診断・治療機器も次々と開発され、癌克服に向けた歩みは確実に加速致しました。今後、遺伝子面からの研究がさらに進んでいけば、また違った局面が展開されることであります。

わが財団は多年にわたって、癌に関する知識の普及活動、および学術研究への助成を行って参りました。その活動が癌医学の進歩、延いては国民の福祉増進に寄与してきたものと自負致しておりますが、翻ってその責任・使命はたいへん大きいものがあると考えております。

現下、内外の諸情勢は相変わらず厳しいものがございますが、今後とも皆様のご支援、ご協力を切にお願いし、ごあいさつとさせていただきます。

* 住友生命保険相互会社 相談役